子ども食堂的な居場所が社会に必要とされる理由は何か
場の多様性・役割の多様性から

藤本　涼花

論文要旨

子ども食堂は、子どもを中心とした地域活動として、近年一種のブームとなっている。その周知も進み、年々の増加とともに、子ども食堂的な居場所が社会には必要だとされる風潮があるように思う。そこで本稿の問題提起として、子ども食堂的な居場所が社会に必要とされる理由は何か明らかにすることを目的としている。まずは、子ども食堂が受け手と支え手に思いがけず与える機能とはどんなものかという問いについて分析する。その問いを解く具体的なケースとして、実際の子ども食堂の事例をもとにする。主に名古屋市北区にある「わいわい子ども食堂」及び「あじまわいわい食堂（以下、わいわい）」へ、筆者が2年半余にわたり通い続けた中で聞き取ってきた情報、37回分の写真付き参加記録をもとに、わいわいの運営スタッフ・利用者の有り様を詳細に記述する。

実際に長期間わいわいへ参加して得られた現状には、新型コロナウイルス感染症流行の前後で居場所の移り変わりが生じたことが挙げられる。コロナ前では、通常の食堂形式に居場所づくりが感じられていたのに対し、コロナ禍になるとかつての食堂の活動形態を変えざるを得なくなり、「居場所なきフードパントリー」が存在感を増した。しかし、コロナによって居場所はなくなってしまったのか疑問視する中、自身が学習支援に関わる機会があった。よって学習支援に参加した様子も織り交ぜつつ、とりわけ居場所に焦点を当て記述を進めた。そして、繋がることの出来る居場所が用意されるには、場（＝関係）に多様性を持たせる必要があると結論に至った。自宅や学校・職場といった縦・横の関係以外にも、損得勘定なしの「ナナメの関係」いわゆる第3の居場所が幅広く存在することは繋がりの強さであると考えた。この「場の多様性」が1点目である。さらに、子ども食堂が1人の力では成り立たないことから、スタッフ達が複数集い、彼らには様々な役割が与えられる。食堂であれば、調理する人、子どもの相手をする人、フードパントリーであれば、食品を配布する人、交通整備をする人などである。特に何もしない見守るだけの人でも、新しい役割が与えられたり、自ら役割を見つけられたりするのだ。このように付与される役割にも多様性が求められると考えた。2点目こそが「役割の多様性」である。

また村上（2022）によれば、子どもの居場所として①複数の居場所②アウトリーチ（ケア）という2点の場の成熟こそが、社会支援的に必要だとしている。その上で、子ども食堂が受け手と支え手に思いがけず与える機能には、①場の多様性②役割の多様性の観点があるのだと、子ども食堂に関わるいち学生ボランティアとして導き出した。さらに、この導き出した結果をもとに、活動に関わる側の「おせっかい」によるアプローチもまた必要不可欠なツールであると考えた。

選別型と非選別型それぞれの子ども食堂から生じてしまう矛盾、貧困と結び付けられやすいがゆえに貼られるレッテル、子ども食堂参加に至らない層へのアプローチなどの側面から、現代社会に子ども食堂的な居場所が求められる理由をさらに追い続けたい。大学院に進学し

てもさらに研究したい今後の課題であると感じている。

第一章　子ども食堂とは

子ども食堂の居場所的価値を明らかにしていく前に、子ども食堂とは何なのか説明したい。子ども食堂とは、子どもとその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための日本の社会活動である。たとえ子どもが1人でも気軽に立ち寄り食事でき、安らげる場所となっている。2010年代頃よりテレビなどマスメディアで多く報じらたことで動きが活発化し、孤食の解決、子どもと大人たちの繋がりや地域のコミュニティの連携の有効な手段として、日本各地で同様の運動が急増している（Wikipediaより）。その背景には、子どもの貧困が表面化してきたことにある。だが子ども食堂には、固定された理念や活動形式は設けられてはいない。政策化されていないゆえに明確なガイドラインなどはなく、自由度が高いという魅力を持っている。そのため子ども食堂という名のもと、地域交流の場として幅広い年代に向けて解放している子ども食堂もあれば、ひとり親家庭など何かしら問題のある親子へターゲットを絞り開催する子ども食堂もある。そして、いかなる子ども食堂にも存在する共通点は、食事を提供することを通じて人と人とのつながりが生まれることである。つながりが生じるとともに居場所も現れる。さらに、子ども食堂は一方的「慈悲」ではなく、「お互い様」の関係にある。 一方的ではなく双方向的で、子ども食堂を支える側もこの居場所に救われることがあるという（成・牛島　2020）。子ども食堂の役割は可能性に満ちており、子ども食堂に関わる人にとっての心の拠り所としても機能している。

第二章　コロナ禍を経て台頭することとなったフードパントリー、その実態とは

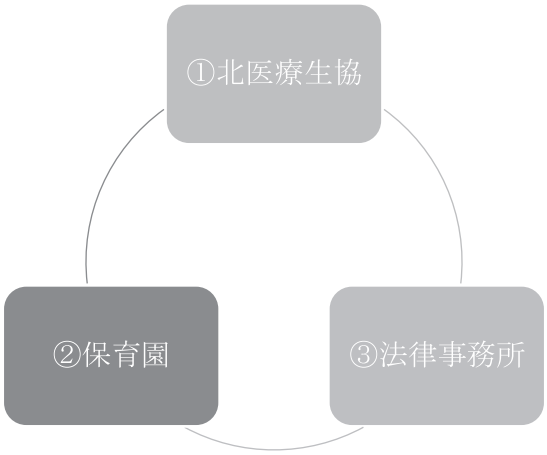
2020年2月末ごろからの新型コロナウイルス流行により、これまで居場所として会食形式で行われてきた子ども食堂は継続・再開が難しくなった。子ども食堂スタッフたちによる「コロナ禍のせいで食べるものに困っている人がいるのではないか」という心配の声はたちまち膨れ上がった。そこで、子ども食堂が食支援の顔を持つことから、これまでの子ども食堂に代わり三密を回避する形で台頭したのが、フードパントリーや弁当販売（弁当配布）といった新たな活動であった。各子ども食堂団体がコロナ禍でも何らかの活動を続けていたいという気持ちから発生した、新たな試みだった。このような経緯があり、子ども食堂からフードパントリーへと活動形態が変化することとなった。

ビニール袋に詰め込まれた食品類を利用者に手渡すという一連の流れが、一般的なフードパントリーとされている。食品類は主に、白米・野菜・菓子パン・レトルト食品・ペットボトル飲料･お菓子が多く、その中身は様々である。その他にもマスクやトイレットペーパー、靴下などの生活用品類が内容物として入っている場合もあるようだ。また、袋を利用者に手渡すのみであることから、長時間の接触はほとんどない。したがってフードパントリーは、密にならずとも食の支援ができるという意味では効果的であり、最大の強みである。子ども食堂に新たな時代が到来したといえる。ここまで、子ども食堂・フードパントリーの抽象的な記述が続いたため、より具体的な子ども食堂について知ってもらいたい。私が定期的に携わる子ども食堂について書いていく。

第三章　子ども食堂ー「わいわい」のケースから

1. 設立当初～コロナ前までの「わいわい」

筆者が2年生の初めから、定期的に通うようにして携わってきたのが「わいわい」である。子ども食堂界隈では度々「わいわい」と呼ばれ、東海が誇る有名かつ大規模で、まさに子ども食堂のパイオニア的存在だ。名古屋市北区でわいわい子ども食堂プロジェクトが主催する、わいわい子ども食堂とあじまわいわい食堂の2点を含めた総称を、以下「わいわい」とする。わいわい子ども食堂は上飯田地区、あじまわいわい食堂は味鋺地区でそれぞれ活動している。食堂時は、子ども食堂0円、大人300円、高齢者100円で食事の提供をしていた。なお、食事のメニューは上飯田地区・味鋺地区ともに同様だ。そして1度の開催で、どちらも150人前後の利用者が来る。150人もの利用者を抱えるこのわいわいは、運営主体となっている3団体の見事な協働によって支えられている。3団体とは、①医療生協②保育園③法律事務所である。①医療生協では主に、会場場所の提供をしている。わいわい子ども食堂では北医療生協すまいるハートビル、あじまわいわい食堂ではあじま診療所、どちらも北医療生協管轄の医療施設である。②保育園は言うなれば、子ども関連のスペシャリスト集団である。主に、調理スタッフとしての役割を担うことが多いようだ。子ども食堂に食事は欠かせない要素である。主婦歴も長いベテラン集団による食事は、味付けにこだわった、野菜も多く摂れる内容になっている。③法律事務所は、会計・事務関係や相談事などに長け、多岐に渡り役割をこなす。フードパントリー事業に活動形態を変えてからは、「なんでも相談会」と称し、利用者の困りごとの相談に乗り、場合によっては必要な機関に繋げることもあるそうだ。さらに、法律事務所には得意先とのコネクションもあるため、縁あってわいわいへ食品の寄付協力をしてくれる企業もある。代表例として、卵・鶏肉・豚肉を扱う株式会社クレストグループは、わいわいに対し惜しみなく支援を続けてくれている。卵と肉類があるだけで、子ども食堂の食卓がバラエティ豊かなメニューになる。オムライスやから揚げは、わいわいに参加する子どもたちに大人気である。以上3団体がわいわいの基盤となり、働きかけをしている。3団体以外にも、わいわいに関わる人・団体はいる。運営資金や食材提供という形で支援をしてくれる企業多数、有志の地域住民、民生委員、社協、大学生ボランティアなど様々だ。上飯田のわいわいが2015年に創設されてから実にこれまで継続的に活動が続けられているのは、このわいわいの基盤と関わり合いがあってこそである。



図表1　わいわいの運営主体

食堂当日は、多くの利用者で会場が溢れかえる。食事提供前には折り紙教室がある。トランプをして遊ぶ子たちもおり、各々が好きなことをする。食事提供の時間になると、子どもたちは仲の良い子同士、学年関係なく食事を楽しむ姿が見られる。あいち子ども食堂ネットワークに支援品としてケーキが寄せられ、わいわいでも提供した際には、子どもたちの輝く顔も見られた。またわいわいでは、イベントを開催することもある。過去には大道芸人やマジシャンなどのパフォーマーを呼び、食堂の場は歓喜に沸き大盛況だった。わいわいスタッフによれば、わいわいに来たことがきっかけで苦手な食べ物を克服できた子、定期的にわいわいに通い「月一のお祭り」のように捉え楽しみにしている子などがいる。このようにわいわいによるポジティブな一面が垣間見える。大人の参加もあるが、基本的に子どもの母親である場合が多く、子どもやママ友と食事を楽しむ。家事育児に追われる母親が、日常の家庭での食事1回分だけでも気にせず済む。わいわいに限定せず子ども食堂には、母親に優しい機能も備わっている。実際の利用者は主に幼稚園・保育園児、小中学生が中心で、親子連れや友達同士誘い合って来る子もいる。上飯田地区・味鋺地区とも地元学区の利用者が多く、わいわいが地域に浸透していることが伺える。また、わいわいのボランティアスタッフは、比較的高齢の世代が多く、スタッフの中には配偶者を亡くした独り身の人もいる。そのため、子どもたちと一緒に食卓を囲める場であるこのわいわいが有難いものだと話してくれたスタッフも実際にいた。したがってわいわいは、母子共々利用者にとってもスタッフにとっても社会的に必要とされる場である。学校でも職場でもない、第3の居場所すなわちサードプレイスとしての役割が色濃く出ている。

2. コロナ禍の「わいわい」

コロナウイルスによる影響で、わいわいでも通常の子ども食堂からフードパントリー事業に変えざるを得なくなった。これは全国の子ども食堂にも同様のことが言える。コロナ禍のわいわいでは、居場所としての会食形式の子ども食堂は一切と言っていいほどなくなった。それでもわいわいでは「食べるものがない人がいるのではないか」という疑念を拭えないまま、スタッフ間で議論を尽くした結果、食を通じた活動をすることを決めたのだった。（緊急事態宣言が緩んだ時期などを見て、青空食堂という屋外開催型の食事提供をした月もあったが、会話を控えるなどの制限ある感染症対策を設けた上での開催だった。）ちなみにわいわいでは2020年、2021年ともに開催を中止した月は一切ない。大々的な緊急事態宣言や第1波、2波などあったものの、保守的になり過ぎることもなく活動を続けてきた。わいわいにとってフードパントリー事業そのものは初めてのことだったが、回数を重ねるとともに試行錯誤しながら改善も図っていった。そのわいわいが1年半以上ものフードパントリーを続け、自身もその様子を見守って来た中で、コロナ禍でのフードパントリーへの参加を経た気づきについて順に記述する。

まずわいわいには、大規模ゆえの制限があることだ。例えば、豊田市では参加者を十数人程度にして通常の会食形式の子ども食堂を開催できるところもある。しかしわいわいは、150人の利用者を抱える大規模子ども食堂である。確かに150という人数はあくまでも、一度の開催時における合計利用者数に過ぎず、コロナ前の食堂開催時も50人弱が入れる食事スペースに利用者が入れ替わりしながらの人数だった。またコロナ前は密を気にすることなくできたから、利用者150人を施設に招くことができていた。しかしながら、コロナになり密になることそれ自体がタブー化されたために、開催場所を思うように使わせてもらえなく

なった。加えて、完全爆発はなんとしても避けなければならず、上飯田の開催場所である北医療生協は医療機関のため、味鋺の開催場所であるあじま地区会館は公共の施設のため、各施設の体制としては非常に保守的で、制限付き使用あるいは使用禁止となった。施設内はあくまでも、食品の保管場所・袋詰め作業の場という位置づけとなり、施設すぐ外の駐車場にて配布作業を行わなければならないのが実情である。

続いて、コロナのせいで「子ども食堂を開きたいが開けない」という葛藤があることだ。運営代表である杉崎伊津子氏が、フードパントリー事業を開始してから半年頃、何度かこのようにおっしゃっていた。コロナが依然続く今も、同様のことを口にするスタッフも多い。わいわいのスタッフは、どんな形であれ飲食できる状態を望んでいる。フードパントリー事業開始から１年半以上が経ち、状況に慣れて新鮮味が薄れ、マンネリ化してきたことも理由の１つだ。スタッフ達は「コロナ前に元通りにとは言わなくても、さすがにそろそろ飲食できないのか」といった心持ちでいる。先述したように、特にわいわいにとっての難点は、開催場所に尽きる。その実情としては、開催場所の使用制限がいつになっても緩和されず、その判断基準もまた不明である状況が続いている。飲食が禁止かどうかも含め、開催場所となる施設からは、具体的な判断基準の開示を求めている。

その一方で、フードパントリーへ切り替えたことによるプラスな面も垣間見えた。それは、支援物資が想像以上に集まったことだ。コロナ禍によって、フードパントリーが世間的に民間企業や各個人へ知れ渡るのみに留まらず、実際に食品・食材寄付の行動に出る各企業・個人が増えた。確かに、コロナ前の会食形式の子ども食堂時も、各企業・個人からの野菜・肉・卵など、調理に必要不可欠な食材はあった。しかし、フードパントリー時に配布する食品・食材と、食堂時に扱う食材類とでは、総量がまるで違う。例えば、わいわいのフードパントリー時では、「カレーの具材セット」として人参・じゃがいも・玉ねぎをそれぞれ約２個ずつが入ったものを150袋分用意する。それぞれの野菜が300個ずつ必要となるが、食堂時では、流石にそれほどの量の野菜は必要ではない。このようにフードパントリー時には一度に大量の野菜が必要となるものの、惜しむことなく十分な量の寄付に協力してくれる企業もいるのだ。野菜を寄付してくれる企業について具体的に書いたが、それ以外にも飲料やレトルト食品、お菓子類を直接わいわいに150個前後、あるいはあいち子ども食堂ネットワーク宛に数千個近く寄付してくれる企業が多くある。企業・個人から子ども食堂を会したこのフードパントリー事業は、まさに民・民支援の代表例と言えるのではないか。地域活動において、物品や資金、人材、情報など、活動に必要となる地域資源の不足があると、十分にその力を発揮できないことがある。そこで企業や個人などが持つ地域資源が、その地域活動へと橋渡しされることで、活動を円滑に豊かにできる。これが民・民支援である。民・民支援とは一般的に、民間企業・民間人が、民間ボランティア団体に寄付をする形で成り立つ仕組みだと捉えれば良い。地域資源、主に食材などの支援品が、民間企業・民間人→子ども食堂などの民間ボランティア団体→利用者へと渡る一連の流れができる。まさにこの民・民支援こそ、多くの子ども食堂で最も活用されている仕組みである。

そもそも、なぜ企業から食材を初めとする支援品が集まるのか。それは、近年話題のフードロス問題に起因している。フードロスとは、本来食べられる食品であるにもかかわらず、捨てられてしまうことによる損失を指す。コロナ禍で飲食店の営業時間短縮や休業要請が続き、多くの食材が行き場を失ったことも相まって、改めて注目されることになった。2015年に国連総会で採択された、持続可能な開発目標いわゆるSDGsでも、目標12の「つくる

責任つかう責任」にてフードロスに関する具体的な目標が示されている。もはや大企業、中小企業のどちらにとっても、SDGs に取り組まないことがリスクとなる時代になったのだ。しかし、企業にとってのフードロス対策は決して重々しいものではない。それは、企業らにとっての SDGs 達成貢献のためのフードロス対策の項目と、子ども食堂ら食材を欲する活動団体との両者の間には、明確な利益が一致するのである。さらに企業には、「社会的貢献をした」という事実までもが得られる。こうして企業と子ども食堂が共同で活動する体制が整いつつあるのだ。世間の子ども食堂に対する認知が著しく進んでおり、子ども食堂支援における太いパイプが出来つつあることが垣間見える。

さらに、集まった支援物資をフードパントリーという場で分配することになるが、実際のフードパントリーでは、配布直前までに時間と人手を要する。わいわいでは、配布当日の直前に十数名のスタッフが袋詰め作業をする。150 世帯分の袋を作ろうには、それ相応の時間と人手が必要になっている。施設内で袋詰めしたものを屋外駐車場まで運び出す作業も、相当な力仕事である。女性の力では困難な場面もある。また一般的に支援物資の受け取りには、スタッフが企業先まで直接車で取りに行かなければならない。これら支援物資が実際に利用者の手に渡るまでに、スタッフ達のたゆまぬ努力が背景にあることは知っておいて欲しい。

そしてフードパントリーに変わったことで、利用者層に明らかな変化が起きたことも外せない。それは子どもから高齢者を中心とした大人に変化したことである。そもそも子ども食堂では、温かいごはんを食べられて、かつ月 1 のお祭り感覚でわいわいと楽しむことができる。だからこそ子どもたちにとっては、フードパントリーなどよりも、子ども食堂の方が魅力的に映るのだろう。一方、大人にとって無料で配布される食品は、行列に並ぶほどの価値があるものなのだろう。確かに「タダに勝るものはない」とよく言われるように、無料のものをもらうと得した気分になるものだ。したがってフードパントリーは、子どもよりも大人にニーズがあると言える。だが、利用者が無料の食品をもらいに来るのには、それぞれ何かしらの理由があると言えそうだ。このように、フードパントリーを機に生活困窮者の存在がより明るみになったことも気づきの 1 つにある。それは、フードパントリー中に利用者の声を聞くべくアンケート調査した際に、「お金がない」「仕事がない」「母子家庭で大変」「米がもらえるのは非常に助かる」といった現実味を帯びた声が上がったことからも起因している。利用者 150 人のうちこのような記述をした人の中には、本当の意味でパントリーを頼りにしていることがよく分かる。そうした経緯から、パントリー継続の必要性が高まっていることは言うまでもない。コロナ禍の緊急事態宣言下（非常時）では、フードパントリーが歯止め要因だとすると、アフターコロナ（平時）では、子ども食堂が促進要因であると言われている。仮にコロナ禍に打撃を受けた困窮者でも、アフターコロナになれば困窮からの脱却は必ずしも可能であるのか。アフターコロナでも、フードパントリーのような歯止め要因の継続が求められるのではないか。それ故に、たとえコロナ収束のめどがたったとしても、パントリー終了にめどは立たないのではないか。ただわいわいでは、そもそもの原点が居場所としての会食形式の子ども食堂だとしており、通常の子ども食堂と無料フードパントリーの同時開催は現状考えていない。食堂とフードパントリーのハイブリッドが取り入れられることがあるとすれば、食堂開催が可能となった暁に利用者におまけとして食品配布する程度だと言う。わいわいでは、コロナの状況を加味し会場の利用制限も緩和されれば、即座に通常の子ども食堂へ切り替えるつもりでいる。よって少し残酷ではあるが、わいわいフードパントリー利用者には、今後永遠にフードパントリーがつづくとは思わないでほしいとしている。これ

までフードパントリーについて書いてきたが、子どもたちの居場所作りはできているのかについても課題が残る。実際に、コロナ前に子ども食堂に来てくれていた子どもが今はどうしているかの心配の声はよく上がっている。子どもたちの居場所の必要性は、まさにこのコロナ禍の今、より高まっている。フードパントリーや弁当配布などで、やむを得ず子どもにとっての居場所が失われつつあるように思えるが、子ども食堂とは異なるようでよく似た形で居場所作りがなされているケースも存在する。次章で深堀りしていく。

第四章　子どもの居場所はなくなったわけではないーコロナ禍の学習支援のケースから

コロナになってから、私は2箇所の学習支援に通うようになった。2020年12月から、子ども食堂なかよしごはん主催の①なかよし勉強会、2021年6月から、名古屋市からの委託事業による医療生協主催の②寺子屋学習塾に参加している。

まず①なかよし勉強会は、2020年11月から小学生から中学生の児童・生徒を対象としている。小学生が7割以上を占めており、様々な学年の子どもたちがいる。週1開催で、40分×2回の学習後に昼食がある。昼食は、対面を避けた（同じ方向を向いての）食事か弁当配布とし、コロナの状況を見ながら食事の仕方を変えている。開催場所は天理教分教会で、サポーターは、学生ボランティアや教員免許所持者、教員経験者で構成されている。主観的に見た雰囲気や様子は、和気あいあいとしており小中学生同士の交流もある。次に②寺子屋学習塾は、中学生の生徒のみを対象としている。北医療生協管轄の施設である味鋺診療所で、キッチン付き会議室を借り開催をしている。市から委託を受けている学習支援である。サポーターは、なかよしごはん同様の構成である。50分×2回の学習後、中学生達には持ち帰り用コンビニおにぎりが2個配布される。コロナ禍の今、施設内飲食禁止となっているが、コロナ前は、キッチンで白米を炊き、味噌汁を作りによる持ち込みのおかずを生徒に振舞ってから帰宅させていたそう。高校受験に向けて勉学に励む中学3年生もおり、時折受験へのプレッシャーをひしひしと感じられる時もある。週2回開催で、一般的な学習塾に通う感覚にかなり近いと思われる。欠かさず出席する生徒もいれば、欠席が続く生徒も多い。北医療生協にて寺子屋学習塾が始まった経緯は以下だ。北医療生協では、かねてより子どもたちに光を当てた活動をしたかったという。ちょうど同じタイミングで、名古屋市が学習サポート事業を始めた。そして、2014年7月より北医療生活は、名古屋市の自立支援プログラム推進事業の「生活保護世帯の子ども学習サポートモデル事業」として名古屋市北区内の2カ所で、寺子屋学習塾を開校することになった。受講費、教材費等完全無料で、生活保護家庭の中学3年生を対象としている。7年経った現在も、北医療生協の施設がある味鋺、平安通、黒川の3箇所で行われている。さらに中学3年生のみの対象から、中学生の進学補助を目的として中学生1～3年生に対象に変わった。加えて、生活保護家庭のみならず、母子家庭などのひとり親家庭も寺子屋の対象となった。「貧困や家庭の事情が原因で、学校で置いてけぼりにされたり、人との関係がつくれない子どもたちに、学ぶおもしろさ、人とかかわることの楽しさを知ってもらいたい」という思いで寺子屋に携わるスタッフもいる。

続いてそれぞれ2箇所の共通点を4つほど記述しておく。1つが、基本的マンツーマン個別指導であることだ。サポーター1人に対し子ども2人の場合もあるが、全体授業のような形式ではない。加えて強調しておきたいのが、学習支援とは呼ばれるものの、実際は「寺子

屋学習塾的な宿題広場」という親しみやすさが色濃く出ており、全く堅苦しいものではない。また、子ども一人ひとりの学力に合わせた指導になっている。2つ目は、カルテを用いて子ども一人ひとりの学習状況を把握できるようにしていることだ。カルテいわゆる指導報告書には、指導科目・指導を通した理解度や留意事項などを学習後に書き込むことになっている。必ず開催日に参加できるサポーターも多くはないため、1人の子どもに付くサポーターは固定でない場合も多い。そのためサポーターが、事前情報として子どもの学習状況や性格を知っておく上で、カルテはマストアイテムとなっている。そして何より、子どもたちの日々の成長を可視化できる必需品にもなっている。3つ目はどちらの学習支援の開催者からも、勉強する習慣をつけてほしい、勉強法を学んでほしいという願望があったことだ。家庭・個人的な事情などによっては、勉強に身が入らない・勉強の仕方が分からないという子どもも実際にいる。例えば、兄弟が多い大家族の子は、母親の目が行き届かなく勉強のしつけが不足していたり、不登校の子は、学校の勉強についていくのが難しく知識の漏れがあったりする。子どもたちが学習支援の場に足を運ぶことから、勉強を身近に感じてもらえるように常日頃からサポーターたちも試行錯誤を繰り返している。そして4つ目が、コロナのせいで思うように会食ができないところだろうか。特に寺子屋では、コロナ禍はずっとコンビニおにぎりを持ち帰らせることしかできていないため、手作りの温かい食事を与えたいところだろう。なかよし勉強会でも、コロナが深刻な時期だと弁当持ち帰りにした月もあった。

続いて、学習支援とは何であったか。自らが学習支援に参加して得た気づきについて記述していく。コロナ禍における学習支援は、コロナ禍でも子どもと関われる貴重な機会であることだ。先述したわいわいのフードパントリーでは、悉く子どもとの交流がない分、余計に貴重であると感じられる。実際、学習支援へやって来る子ども達は皆好みや性格、考えなどが全く異なる。しかし、母子家庭、父子家庭、大家族、不登校、ヤングケアラー、外国にルーツを持つなど、何かしらのバックグラウンドのある子ども達がほとんどである。軽度な子から重度な子もいる。子どもとは自然に接してはいるが、それぞれの子どものバックグラウンドを把握した上で指導に当たっている。この学習支援がきっかけでプラスに変化した子も実際におり、これは自分が担当している子がまさに当てはまっている。その子は非常に大人しく暗い雰囲気を纏っていたそうだが、学習支援を通じて楽しそうな雰囲気を醸し出すようになったとサポーターの間でもしばしば話題になる。その子との関わりは決して単なる関わりではなく、縁あってその子の一生のうちの一部に関わらせてもらっていると思える。そして自分自身が他者のためになっていると実感できるのは、子ども達のポジティブな変化を間近にできたからこそである。加えて担当の子の進路を叶えたい、今後の行く末を見守りたいという意識変化も起こった。これは筆者自身の母性本能の芽生えや願望に近いと思われるが、学習支援とはまさに子ども達の成長に寄り添えるきっかけであった。そして、私にとって学習支援に行くことイコール子ども達から元気をもらいに行くことに繋がった。学習支援が子ども達の勉強面以外でもプラスに働きかけていることから、一般的な学習塾にない効果が確認されていることは明らかではなかろうか。

以上が学習支援による事例だ。コロナ前から学習支援を続けている団体もあるが、コロナ禍においても子どもの学習を介した居場所が形成されていた。学習塾に通いたくても金銭面などで通えない子も一定数いることから、学習支援ないし無料塾はその子らにとって、有難みのある助けられる場であることには間違いない。実際、筆者が通う2箇所の学習支援とも、何かしらの困りごとのある子どもの参加が大半を占めている。これは、学習支援側もそういっ

た子の参加を引き入れるようにしていることも理由の１つだ。そのため学習支援ないし無料塾は、居場所的要素も多少あるものの、支援的要素がとりわけ強い活動になっていることが分かる。子ども食堂が居場所・支援の両要素に惑う中、学習支援はその両要素のバランスが割と固定化されている。そのため、子ども食堂は目指すところが薄ぼんやりとしているのに対し、学習支援にはおおよそ目的と目標があり、目指すところも比較的明確である。とりわけ学習支援には、「学習塾」的な居場所作りとそれによる支援という、子ども食堂よりも明確な向かう先を示せている。しかし、子ども食堂の諸活動の一環あるいは子ども食堂とは別に、学習支援の活動を行う団体は実際多くはない。子ども食堂と学習支援を比較すると、子ども食堂には、あいち子ども食堂ネットワークやむすびえといったネットワークの場があり、県・全国の子ども食堂数を把握出来るほどであるのだ。子ども食堂関係の意見交換会やフォーラムなどの開催も多い。一方の学習支援には、元教員・教員免許所持者などの人材が必要となるケースが多い。子どもに勉強を教える立場になることから、相応の責任も伴う。教材なども抜かりなく揃える必要もある。よって、子ども食堂とはまた異なる方面で立ち上げへのハードルが高いものと捉えてしまうかもしれない。

コロナ禍の到来により子どもの居場所は減っただろう。しかし、学習支援に子どもの居場所を担える可能性がある限り、未だ高くない学習支援の浸透率を引き上げる必要性はありそうだ。以上が学習支援の実態である。メインとして取り上げている子ども食堂から僅かに学習支援へと逸れる形になったが、次章では居場所の多様性から子ども食堂に迫る。

第五章　居場所の多様性が求められる社会

村上（2022）は、自身がフィールドワークを行った西成区のケースを取り上げ、現代社会には西成区のような事例の居場所づくりがなされるべきだとした。西成区の居場所づくりの詳細については省くが、村上は西成区のキャッチコピー「来たら、だいたいなんとかなる」がまさに嘘偽りないものとしている。そう述べた上で、複数の居場所が地域に点在すれば、どこか自分が落ち着ける場所に出会えるだろうという。そして自宅や学校、職場以外にそのような場所を持つこと、フラットな関係を築き誰かを頼れる居場所を持つ地域であること、これは自分の生存を無条件に肯定する資源であると言った。自宅や学校、職場が縦と横の関係であるならば、本稿が指す「居場所」とはナナメの関係であり、いわゆる第三の居場所である。村上はこの「居場所」と、重層的なアウトリーチの必要性も説いた。アウトリーチとは、働きかけることや援助することを指す。保育園などの送迎、不登校児への声かけ、同行支援などがこのアウトリーチに該当するが、もちろんこれら以外にもアウトリーチはまだ多くある。アウトリーチを張り巡らしたネットワークをきっかけにSOSを拾い上げ、顔の見える関係として出会っていくことも必要とした。村上が必要性を説いた以上２点が、「居場所」と「アウトリーチ」である。子どもの居場所におけるアウトリーチとは、ソーシャルワーカーや家庭支援員といった専門家を介することから、とりわけ支援的意味を持つ。一方の子ども食堂にはもちろん支援的要素もあるが、一旦こうした支援的要素からは少々距離を取る形で、筆者は「役割」に焦点を当てることにした。役割の多様性については次章で詳しく論述する。前置きが長くなってしまったが、まずは居場所の多様性についてだ。

先述した通りわいわいにおけるコロナ前の食堂では、子どもの居場所の確保ができていたものの、コロナになるとそれは一変した。フードパントリーという新たな活動形態に変えざ

るを得なくなり、居場所らしき居場所は消失した。まさに、「居場所なきフードパントリー」と言えよう。この「居場所なきフードパントリー」を取り上げることで、居場所について今一度見つめ直すきっかけにしたく思う。まずはわいわいのケースを用い、大量配布、寄せられる苦情、大人利用者の三点から、「居場所なきフードパントリー」における負の側面に迫りたい。1つ目は、大量配布についてである。わいわいでは、150もの世帯分の食品が詰められた袋を用意している。上飯田で150味鋺でも150、ひと月に計300もの食品袋を作る。そのために、配布当日までには食品集めとしてコアメンバーが車出しして大量の食品を企業等まで取りに伺い、当日もそれらの袋詰めをスタッフ複数名で行い、一気に利用者へ配布を行う。上飯田と味鋺両日とも、こうした一連の工程を経て出来上がった150袋が一瞬にしてなくなるのだ。1度の開催につき、10分から15分強だけの時間があれば全て配り終わる。瞬く間に150もあったものが即座に捌ける様子を目の当たりにする日々である。続いて、2つ目の寄せられた苦情についてである。苦情として圧倒的に多いのは、「配布開始時間までには行列に並んだのにもらえなかった」というものだ。配布当日にその場で言い放ち帰っていく利用者もいれば、帰ってから電話でクレームを入れる利用者もいる。わいわいでは、予告チラシに必ず「無くなり次第終了」の文字を明記している。にもかかわらず配布物を与えられなかった人の中には、このようにぼやく人がいる。「もらえなくて残念」「次回はもらえるといいな」と捉えられない人もいることがよく分かる。さらに、米に虫が湧いていたという苦情が寄せられたこともあった。寄付された米に不良があり、わいわいでも米の状態確認を特に行っていなかった。わいわいスタッフが新しい米と交換しに行ったことで解決はした。もちろんどの苦情も、大人の利用者からのものである。12月に開催があった名古屋市子ども食堂連絡会のグループ討論では、他の子ども食堂でも同様に利用者からの苦情があったようだ。1つは、袋の中身が違うという苦情が寄せられたことである。実はわいわいでも中身が僅かに異なる構成である場合がしばしばある。食品によっては、個数が150以上ないものもあり、同価値で似た食品を入れるようにしている。袋の中身に価値の差が出ないように気をつけている。今のところわいわいには中身違いの苦情はないものの、いつ苦情があっても対応できるようにしておくつもりでいる。もう1つは、賞味期限が切れていたという苦情もあったそうだ。わいわいでは期限管理は厳密に行っているが、こちらも今後とも気を付けなければならないと再度自覚している。また、苦情というよりも誤解が生じてしまったケースもあった。それは、わいわいフードパントリーに初参加し、その大半が大人を占める行列を目にした利用者が、「子ども食堂は本来子どもが来る場所」であると新聞の投書を行っていたのだ。この事はすぐわいわいメンバー間で共有され、子ども食堂（フードパントリー含む）は「だれでも食堂」だという趣旨を今一度理解してもらう運びになった。最後に3つ目の、大人利用者についてである。活動形態がフードパントリーへと変わり、大人利用者が激増したことは言わずもがなであるが、中にはマナーの悪い大人利用者もいる。参加した150人中ほんの数人の割合ではあるものの、「一世帯一袋」の決まりを守らない利用者が一度の開催で何組かいるのだ。袋をもらったにもかかわらずもう一袋くすね、逃げ去るように帰っていく利用者がいたこともあった。

ここまでで多くの負の側面を見てきた。やはりこのようなマイナスな面を受け続けると、スタッフ芽生える気持ちにも変化が生じるものだ。まず、目にもとまらぬ速さで袋が捌けていく様子を見たあとは、やり切った満足感に加えて呆気なさ・物足りなさにも襲われるのだ。スタッフによっては、満足感よりも手応えのなさの方が上回るかもしれない。「用意までに

はこんなにも時間がかかるのに、捌けるのはこんなにも早いものか」と。また苦情が集まるとで、コロナ禍でもしぶとく活動を続けていることに疑問を感じることすらある。受けた苦情をどうにかしようと反省と改善を繰り返し頭を抱える日々である。一世帯一袋のマナーを守らない利用者を目の当たりにすると、その分を「他の利用者に行き渡せることができたものを」と晴れやかな心ではいられない。そして以上3点に共通して、フードパントリーの活動とは本当にやりがいあるものなのかという疑問が生まれる。フードパントリーよりも通常の子ども食堂の活動に戻りたいと、スタッフ間で主張が強まるのも至極当然であると言えまいか。利用者には、子ども食堂及びフードパントリーがスタッフら善意による公的ではない活動であることを十分に理解してもらい。利用者のリテラシーの向上を願うばかりである。「居場所なきフードパントリー」が与える影響として、スタッフのやりがい搾取をはじめとする課題が浮き彫りとなった。

この「居場所なきフードパントリー」が当たり前になりつつある中、毎月のフードパントリーで大人利用者を見る機会が増え、気づいたことがある。それは大人利用者達は、わいわいスタッフに自ら接してくることがほとんどないことである。接してくることもないため、相談事を持ちかけて来ることもない。わいわいでは配布時の傍ら「なんでも相談会」を設置しても、相談事は極わずかだった。暑かろうが寒かろうが朝早くから食品配布をもらうべく行列に並ぶ利用者の中には、本当の意味で困窮している利用者が確かにいるはずだ。それにもかかわらず、相談事を持ちかけて来る利用者は全くといっていいほどいなかった。一方の子ども達は、壁を作ることなく無邪気に接してくれることがほとんどだ。コロナ前の通常の食堂でも子ども達の多くがそうだった。しかし大人の中には、とりわけ日本人由来の「恥の文化」や他人に頼ろうとしない意地を持つ。このように大人利用者の実情を加味した上で、わいわい側からおせっかいを焼いていくべきだったのかという問題点が浮かび上がる。実際に、わいわいフードパントリーでのリピーターらしき利用者について生活状況等の情報が得られて、運営委員会で共有しても「へえ、そうだったんだ」で済ませてしまったことがあった。150人もの利用者がおり、さらにその中に困っている人も多くおり、キリがない状況ではあれど困っていると分かれば一言だけでも声をかけるおせっかいさは失うべきではないと今更ながら改めて痛感した。その一言で利用者にとって、ただの食料確保目的の参加が、スタッフの人とちょっとした話をする関係ができる場であると認識が変わるかもしれない。コロナ禍を経て、世間的に子ども食堂のような居場所がいち早く求められるようになった。ただ居場所がそこにあることの応用として、「おせっかい」の必要性もまた高まっているのではないか。次章では、居場所の多様性のみではなく役割の多様性からも子ども食堂に迫る。

第六章　役割の多様性も必要とされる社会になった？

子ども食堂は、一人では務まらない。子ども食堂に来てくれる利用者や、活動に賛同してくれた協力者など、様々な人がいて初めて子ども食堂が成り立つものだ。子ども食堂を運営していくにあたって、調理する人、受付・誘導する人、相談に乗れる人、困っている人を他機関へ繋げられる人、子どもの面倒を見られる人、はたまた特に何かすることなく見守るだけの人など何かしら役割を持った人で構成され活動を行う。何もしない人でも、後から新たな役割を付与されたり、自分の役割はこれだと自覚したりする人もいる。それだけでなく、ただ見守るだけの役割でも実は立派な役割なのである。例えば、子どもが危ないことをして

怪我をしないかなど、見張りの目が必要な場合もあるからだ。とりとめのない役割でも「ただそこにいる」だけで役割を果たせている。それが子ども食堂が与えてくれる優しい一面である。役割が与えられるということは、同時に「さあ、やり遂げよう」という使命感、自分が誰かから必要とされている実感も付与される。役割を全うした後は、達成感ややりがいを味わえる。自己肯定感の向上も期待される。具体例として、新たな役割の付与を前向きなものと指摘した新聞記事を紹介したい。コロナ禍の記事に、子ども食堂のスタッフとして活躍する70代女性の声があった。記事を書かれたご本人が「子ども食堂なかよしごはん」にて見聞きし体感したことが250字ほどの作文からよく伝わってくる。具体的には、実際に調理スタッフとして大量の食事を作ったり、支持をしてくださる方々へ子どもたちと一緒にお礼の手紙を書いたりし、子ども食堂代表者の手伝いをしているそうだ。筆者もこのなかよしごはんの勉強会には参加しており、この女性は勉強後の昼食も作ってくださる。。さらに女性は、「ここに出かける時の私は、喜々としていると夫は言います。年寄りに役割を与えると、生き生きしてくることに、自分で合点しています。」と言う。新たな役割を与えられることは自らの生きがいにつながり、活気に満ちている様子が他者の目にも映るということである。したがって子ども食堂的な居場所がそれに関わる人を豊かにする要素には、やはり「新しい役割を与えられる」ことではないだろうか。活気に満ちた自分に出会える、役割ある居場所の存在が、やりがい搾取であるとは思えない。動機はどうであれ（この女性の場合、「誘われた」からだった）自発的に活動に関わり続けたいと思える。まさに子ども食堂的居場所の醍醐味であると、この記事からは読み取れた。

また利用者のうち、自ら何か役割を果たしたいという利用者もいた。子ども食堂・フードパントリーには世話になっているから「何か力になれませんか」と、手伝いに加わるケースもあった。このように子ども食堂的な居場所では、利用者側の心をも動かし与えられる側から与える側にも変化させる機能まで備わっている。コロナという状況下であることも加わり、繋がりが希薄した孤立社会には、役割が与えられやりがいを得ることが必要ではないか。役割を与えることの出来る居場所の必要性が高まったのではないか。このいくつかの役割を担うのはもちろん、学生やご年配など年齢は様々だ。まずは、子ども食堂的居場所に関わる学生ボランティアのポテンシャルについてである。子ども達にとって、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんは大好きな対象である。以下の写真を見てほしい。

写真１　大学生にじゃれつく子ども

写真２　大学生に群がる子ども達

この写真は、先述したなかよし勉強会でのひと時を切り取ったものである。勉強が終わった後は自由時間になると子どもたちは各々のことをするが、大学生スタッフの周りに子どもがいない時はない。学習時のマンツーマン指導もあり、学生と子どもの距離が縮まることは言うまでもないが、子ども達にとって、年齢の離れた年上の「お兄ちゃんお姉ちゃん」世代は興味深い対象であるとされる。時に、子ども達にとってこのお兄ちゃんお姉ちゃんが身身近にいる憧れの対象ともなり、心の支えやこれからの頑張りに繋がることもあるかもしれない。子ども食堂的な居場所において、若い学生スタッフという役者は、子ども達のロールモデルとして必要な存在であるといえる。

役割には、若いお兄ちゃんお姉ちゃんの例のみでない。子どもたちは、おせっかいなおじさんおばさんものことも好きである。親や先生ではない目上の人物が、自分を気にかけてくれる。こうした子ども達の認識のもと、大人への一種の信頼感が芽生えているように見える。おせっかいを焼いて気遣ってくれる大人は、人見知りな子どもでも取っ付きやすい対象である。これは寺子屋勉強会での出来事だ。筆者が初対面で人見知り気味の中学生の子を担当した時、一言も話してくれず距離が一切縮まらなかった。一方でその子は、とあるご年配のスタッフとは気兼ねなく楽しそうに会話していた。実はこのスタッフ達は子どもと接する時、常々おせっかいを焼いて気にかける態度を取っている。このおせっかいこそ、子どもとの距離を程よく縮め、子ども側も話したい気持ちが掻き立てられるのだろう。しかし必ずしも何でも話したがる子ばかりではなく、隠そうとする子もいるだろう。確かに、村上（2022）が指摘したアウトリーチによるケア的なアプローチも可能だろうが、学生や大人という役割でも担えるアプローチ方法も十分にあるのだ。だから子どもが身近なお手本として近づきやすい学生、気にかけてくれて取っ付きやすいおせっかいなご年配の力が本領発揮される場が、この子ども食堂的居場所には必ずと言っていいほど存在するのである。

ここまでで役割の多様性・影響に加え、「おせっかい」についても論述した。度々記述の見られるこの「おせっかい」とは、世話焼き、世話好き、ちょっかい、干渉、出しゃばり、面倒見が良いなどどれも「かまってあげる」ことに変わりはなく、子どもの居場所界隈ではどれも悪意なき親切心から発生するものである。スタッフが子どもに対し「宿題はやった？」「学校楽しい？」と何気ない歩み寄りを見せることから、おせっかいはすでに始まっているのだ。では、コロナ禍でのおせっかいはどうだろう。やはりおせっかいには、おせっかいを焼く側と焼かれる側の二者が必要である。さらにフェイス・トゥ・フェイスによるおせっかいが求められるが故に、非接触が求められるコロナ禍におせっかいを焼くことは容易ではない。このコロナ禍という状況下もありわいわいでは、利用者に喋りに行き自らおせっかいを焼きに行くスタッフは少なかった気がする。配布前までが一苦労のフードパントリーであるために、袋詰め・運び込みの作業が終わると作業をやり切った満足感でおせっかいする余裕がなくなるのも、理由の一つかもしれない。またおせっかいを焼くにも、自分に精一杯で余裕がないとできない行為である。あるいは、おせっかいを焼くことに地域性の違いが見られるのか、おせっかいに無関心な人が増えているのか。このおせっかいが担うはずの子ども食堂的居場所には、未だ多方面にわたる疑問を抱かざるを得ない。次章では、自身にとっての子ども食堂を振り返りつつ、この論文では明かしきれそうにない残された課題も挙げていく。

第七章　居場所社会に抱く疑問を解決したい

わいわいを中心とした子ども食堂に関わった１人の学生が、実際に見聞きし体験した実体としての子ども食堂を論じていく。まずとりわけ子どもたちにとって、子ども食堂はとはやはり「月１のお祭り」だということだ。楽しくなさそうな顔、嫌そうな顔をして子ども食堂にやって来る利用者はまず一切いない。人によって異なるものの、楽しみを与えてくれる場所、ほっとできる場所、人と会える場所など、何はともあれ人が自ずと無意識のうちに定着したくなる場こそ子ども食堂であると考える。しかしコロナ禍では、この月イチのお祭りの開催が難しい状況にあり、フードパントリーという新たな形態になった。コロナ禍を経た子ども食堂は、一長一短であった。子ども食堂は、有志のボランティアスタッフ達による民間発の活動であることが多い。有志でやってることであるから自由に進められる。しかし民間での自由の利く活動ができる一方、それに伴う障壁があることは忘れてはならない。まさに自由度の高さがあったからこそ、食堂からフードパントリーや弁当配布へと抵抗なくジョブチェンジができたのだ。ただ、フードパントリーでの障害もあった。例えばわいわいでは、食品配布は「バラマキ」だと言われてしまったり、苦情が多く寄せられたりした。コロナ前の子ども食堂では、このような経験が一切なかっただけに、驚きや悲しみ、複雑な感情が芽生えてしまう。

こうしたコロナ禍という未曾有の事態などの紆余曲折を経た今でも、筆者にとって子ども食堂への参加は貴重な体験だったと思える。子ども食堂の担い手である有志スタッフの方たちの慈善活動への行動力・実践力を間近で見られる場こそが子ども食堂だった。スタッフの方たちのほとんどは、年金受給世代のシニア層だ。日常的に（良い意味で）フットワーク軽い方々が多いものの、完全無償で子ども食堂に携わっている方々である。確かに、長年の経験もあってのことで、市民活動のこなし方を熟知しておられる。社会問題にも関心を持った、活動的で若々しい、眩しい存在だ。こうした尊い方々が活躍できる場が、日本社会にはある。故にボランティア人間をさらに活かすための社会づくりを、より強固にしていくべきだと思う。また筆者自身もわいわいに関わる時間も長くなり、スタッフの方たちに名前を覚えてもらえ、何気ない雑談をする機会も増え、徐々に打ち解けることができた。わいわいに、活動に参加したいと思える自分がいる。スタッフの方達に会いに行くのがささやかな楽しみでもあり、「自分はこれだけ通いつづけているのだから」というご縁も無下にできない気持ちや、使命感など様々な感情を原動力に参加を続けられている。

ここまでが、自身の子どもの振り返りである。続いては、論文執筆を進める中で始めは考えてはいなかった新たな課題が浮かんだことから、この章にて記述を残したい。まず子ども食堂には選別型と非選別型のどちらもが存在する。選別型と非選別型では、前者だとどうしても貧困の特色が先行してつきまとい、後者も平等を意識したかに見えるがやはりバラマキであるとされる。子ども食堂のターゲットがこの二択だけであるのに、どちらを選んだとしても、「貧困」「バラマキ」のネガティブな一面に至ってしまう。子ども食堂に矛盾が生じる、最大のパラドックスである。しかし、いずれか片方の型の採用するような機械的な手段は選べないのもまた事実である。どちらの型も必要であるから、矛盾を抑止するしかない。無念にも、矛盾と付き合いながらの活動は今後も続くだろう。ただし、両者の型を肯定し統合し矛盾の抑止に努めながら平行線をたどっていくのであれば、より高次元の段階に進めるのではないか。貧困、バラマキといったマイナス要素に対する、悪意なき提唱・バッシングは、

この矛盾を過剰に露わにする根本である。この根本に蹴りをつけ、何とかすることが優先されるべきだ。もはや矛盾の存在こそが、子ども食堂が研鑽を積めるきっかけであったと捉えてしまうのも興味深くないだろうか。

さらに、どちらの型を取り重んじるか、その悩みで埋め尽くされる運営者は全国各地におられるかと思う。また、子ども食堂が貧困と結びつけられやすいために、子ども食堂にレッテル貼りがなされることを恐れる方もいるだろう。しかしどちらの型を採用する運営者の方にも、自らの子ども食堂に誇りと自信を持ってほしいと切に願う。なぜなら子ども食堂は、偏見のみに基づいて何かしらの一言で片付けられない価値ある存在だからだ。何かのきっかけで子ども食堂を始め、活動を続ける中でも幾度となく反省と改善を繰り返してきた運営者・その他スタッフも多いかと思う。実際筆者もわいわいのコアメンバーへ仲間入りしたのち、メンバーらによる改善の議論を重ねる様子を間近で見てきた。まさに子ども食堂は、文句のつけようがないほど意志を持った存在である。子ども食堂へのレッテル貼りや誹謗中傷は、意志を持つ子ども食堂に対する侮辱に他ならない。そもそもの根元にある偏見、マイノリティに対する悪意あるバッシングは早急に取り除かれなければならない。社会的に求められる存在となった子ども食堂が今後、一直線を辿るか数多の可能性を持つのか見守りたいと思う。

おわりに

まず子ども食堂には、原則として以下三点が必要不可欠であるとされる。

・自由で多様性に富む　（…それゆえの迷いの発現）
・自主性、自発性（≒おせっかい）
・連携があるから続けられる（PTA、子ども会とは違う）

そして上記を踏まえ、子ども食堂的な場が社会に必要とされている理由は何だろうか。そして本稿の問いである、子ども食堂が受け手と支え手に思いがけず与える機能とはどんなものか。それは、縦、横だけではないナナメの関係性ある居場所、そして役割が付与されることは、人には欠かせないからだ。学校では児童・生徒として、職場では社員として、といった既成の枠に収まった役柄ではない、その人がただホッとできる役割ある居場所は、繋がりが希薄になり孤立化の進む我が国に、より密接であるべきではないのか。ただ、手がかりにした「おせっかい」が生み出す可能性がいかほどかについては、参加した子ども食堂によるだろう。わいわいのみならずより様々な現地に足を運び、スタッフと利用者の関係や様子を実際に見て学習する必要はあった。また、子ども食堂的な居場所の外側にいる子については触れて来なかった。その子らを手引きするにはどうすべきか、こちらもやはり「おせっかい」による引き入れ手段のみなのか、他の手段はないか。多くの課題を残したまま終わる形にはなるが、今後の大学院進学後もさらに追究していく課題にするつもりである。

子ども食堂の社会的な存在意義としては、極端な言い方をすると「必要としている人がいるから、あったに越したことはない」のだと思う。利用者のみならず、運営スタッフやボランティアも子ども食堂の活動に救われている、双方向な関係を築けているうちは、本当の意味で子ども食堂はあって良かったと思える。ただ、ウィズコロナの現状が当面の間続くことになるだろうから、アフターコロナにおける子ども食堂の行方は気がかりである。最も、コロナが世界的に流行したのちの社会が実際に来てみないことには判然としないだろう。子ども食堂の課題依然として残るが、子ども食堂はブームだけで終わらせられない。終わらせて

はいけない理由がある。それでもなお､いち子ども食堂ボランティア参加者･いち運営スタッフとして今後とも子ども食堂への見聞を深めて行きたいと思う。

【参考文献】

成元哲、牛島佳代「食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容」『中京大学現代社会学部紀要 14-2』、2020 年 pp. 118
村上靖彦「ケアから社会を組み立てる」『世界』、2022 年 1 月号、pp. 107-114
「子ども食堂　趣旨を理解して」『中日新聞』、2020 年 5 月 31 日、夕刊
「『子ども食堂』は大人も歓迎」『中日新聞』、2020 年 6 月 16 日、夕刊
「誘われて」『中日新聞』、2020 年 6 月 30 日、朝刊
「子ども食堂」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』（https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ 子ども食堂，最終閲覧日：2022 年 1 月 10 日）

【謝辞】

本論文執筆にあたり、ご協力頂きました多数子ども食堂の方々に厚く御礼申し上げます。また、2 年半もの期間参加させて頂いた「わいわい子ども食堂」とそのスタッフの方々には感謝に耐えません。筆者自身が子ども食堂という場に直接身を置く体験を重ねる毎に更なる学術的な関心を持つことができ、引き続き大学院にて探究をする運びとなりました。子ども食堂関係者の方々には今後ともお世話になることと思います｡何卒よろしくお願い致します。さらに、筆者の考えがまとまらない際に実りある助言をくださった、成ゼミ同級生、そして成教授、全ての方々にこの場を借りて改めて深く御礼申し上げます。